
Despair と言う名の希望。

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Despairと言つ名の希望。

【Nコード】

N0850E

【作者名】

貂寡

【あらすじ】

イジメは人間の弱さによって汚く汚れている。そんなイジメを受けている庵崎はある日一人の男性に会い恋に落ちる。イジメによって産まれた恋の話。

君は何で泣いているんだい？僕が悪いのかい？何で笑顔で居てくれないの？

ほら空を見てごらんあんなにも星が輝いているのに、ねえ何で泣いているの？

僕には分からないよ、君が泣いているわけが。

私だって分かんないよ。何で泣いているのか。確かに星は綺麗だよ。だけど心の中がおかしいの、ねえ助けてよ。私をここから出して、そして美しい物をたくさん見せて。君が綺麗だと思うものを・・・

黒板から落ちた黒板消し、辺りには色とりどりに混ざりあったチョークの粉が散らばっている。黒板を見れば、当番が消し忘れた薄い文字が残っている。

【Despair『絶望』】と　　私は教室を後にする。何とも言えないような静けさが最終下校時間を過ぎた校舎には広がっ

ていた。

高校に入っただばかりの頃はこんなことを考えたり感じたりはしなかった。毎日が、嵐のように過ぎて行く。入学式、対面式、部活動紹介、そして、ごく普通の授業。どれも中学生だった私には新鮮だった。

しかし、やはり飽きはくる。特に私には友達と呼べる仲間がない。それは、致命的な入学ミスだった。そして今、私は毎日同じ事を繰り返す。授業を聞き、ノートをとりあえず取り、部活には行かないで帰宅する毎日。何とも平坦で平凡な毎日。こんな生活は惨めだとも思ったし、抜け出したいとも思った。だけど、もう遅い。私にはもう帰る場所すらないのだから。

いつの間にか辺りが変わっていった。私はクラスに居ても、存在を抹消されるようになっていた。時々、大事にしていた物が無くなったりした。これって、イジメなのかなと考えたりもした。だけど、どうやって解決するのか友達のない私には解らなかった。

無視していたらもっと、イジメは酷くなっていった。私から話しかける事はほとんどなかったが本当に困った時に何度か話しかけたりするが、よくシカトされるようになった。

放課後帰ろうと、靴を履くと画ビヨウが足の裏に刺さって血がでたりした。

授業で必要な物が持ってきたはずなのに無くなった。

そんな事が続き、私の凶太かった精神も流石に病んでいった。

いま、校門を歩み出て駅へと向かうが、徒歩25分は慣れてもきつかった。

出合いなんて早々無いと俺は別れた彼女にひっぱたかれた頬をそっ

と擦る。やっぱり女に叩かれても本気だと痛いものだ、つくづく気付かされた。ポケットからケータイを取り出す。新着メールなし、これほど寂しい事はない。ケータイを開けても何も無い、何だか切ない。俺はケータイに目を落としたまま校門を通り過ぎる。

私は人の気配に気付かなかった。ただボンヤリと空を見上げていた。

俺は坂道をくだる。よく前方不注意で友達に叱られるが、まさかこの癖が彼女との出会いとなるとは思っても見なかった。

【ゴンッ】

誰かが私にぶつかってきた。私はよろけて倒れそうになる。しかし、ぶつかってきた誰かが私の手首を持って支えてくれ、落下を防ぐ。

本当に迂濶だった。こんな所で人が立ちばなしで空を見上げているとは思わなかった。しかも、目に飛び込んできたその顔は美しさと幼さを兼ね揃えていた。

私はぶつかってきた相手を見た。整った顔を持っている男性だった。しかし、見たこともない人だった。

だけど、俺は私は思った。この世界にも神様は居るんだって、そして私の俺の目のまえにいる彼女彼は誰なのだろうと

そう、俺は恋をした。失恋して何も受け入れる物が無くなった俺にはこの出会いが運命だと思えなかった。

私は恥ずかしくなった。この場から居なくなりたいとも思ったし、いま自分が考えていた事を悟られたくないとも思った。

俺は、彼女が顔を赤くしているのを見て掴んでしまった手首をそっと離す。

「ごめんな。俺、よそ見してて。ついぶつかった、ホントすまん。」

彼の声は心地よく私の耳に吸い込まれていった。何時からだろっ。こんな心地よい声を聞かなく成ったのは。私は顔が熱くなっていく感覚をおぼえた。もしかして、一目惚れ？自分で考えた事を首をふ

り考えないようにする。

「すみませんです。本当にすみません。私の方が悪いんです。それでは、失礼します。」

彼女の声は耳に吸い付いて離れなかった。しかし、その声とは裏腹に彼女は逃げるように立ち去ろうとする。

「まっ待ってくれ。」

俺は彼女の手首をもう一度掴もうとした。

「いやです。」

彼女はすたすたと歩いて行く。

私は恥ずかしかった。今自分が考えていたことや顔を赤くしている事、それを悟られなくなかった。

けど待ってくれと言われたときはドキリとしたが、なるべく私は人に関わりたくないなので逃げる。

彼女に俺は嫌われたのか。待ってくれと言った時も微動だにもしない様子だった。彼氏でもいるのだろうか？あつ、名前聞き忘れた。俺って本当にどじだよな。友達からもよく言われる。彼女が立ち去

つたいま、俺の目の前には何も無くなつてはいなかった。ラッキー。俺はそう思うなりすぐに彼女がいた場にしゃがみこむ。もう一度彼女に会えそうだ。そつと赤いケータイを手に取る。

家に帰って私は愛用の携帯電話を取り出そうとポケットを探る。しかし、どこを探しても見つからない。どうして無いのだろう？確かに学校を出る時は私のポケットに存在していた。けど今はない。もしかして、あのぶつかられてこけそうになつた時に落とした？

俺は彼女の名前を知つた。あんざき かよ庵崎珈誉そうケータイに書いてあつた。名前が分からないと俺は届けられないなと悪い気がしながらケータイを開けた。そして彼女のクラスをした。1年3組。俺は2年なので年が違う事に腹がたつた。

携帯電話を探してへとへとになつた私は教室でちょこんと座つていた。

よくケータイを落としてくれたものだ。
神様はおやさしい。

俺は1年の教室がある3階まで一気にかけあがる。廊下には1年どもがわんさかいる。3組は以外と階段から距離が離れてなくすぐに見つけて覗き込む。端の方に彼女がいたがこつちには気付いていない。名前は知っているが今叫ぶと誤解を呼びかね無いから止めてお

く。辺りの女子がなんか俺を見て話題にしているらしい。そんなに可笑的いか？

私は女子達が異様にうるさかったので、睨もうと顔を上げた。しかし、話題に上がっている奴はどんなやつかと教室の入り口に目を向ける。そこにはどこかで見たような男性が立っていた。

彼女が気付いたようなので手を降ってみる。

「あー」

彼女は辺りを気にせず大声を出す、辺りの人たちは微動だにしない。なにかおかしい。

私は彼が誰だか思いだした。昨日、ぶつかってきた人だった。もしかしたら私の携帯電話を知って要るかもしれない。

彼女は俺に近づいてきた。

「あのっ、昨日の人ですよね。」

俺に向かって話しかけて来る彼女はとにかく可愛く微笑んできた。
俺はクラスのほぼ全員が見ていたのを知っていたので彼女の手を掴み教室から出る。

「ちよつと・・・」

彼女は戸惑うように辺りを見回す。しかし、彼女が見た方向の生徒達はふっと、偶然を装って顔を背ける。

私は意味の分からないまま彼に手を引かれていた。

“これは絶対にイジメだ”俺はそう確信した。クラスメイトの態度といい、彼女無視宣言でも出しているに違いない。彼女は悲しく無いのだろうか。俺はイジメを見る度に人間の弱さをした。だからイジメは許せなかった。

私は彼に手を引かれて、屋上に連れて来られた。授業が始まる前のここは人が一人もいなかった。

「あのー。」

私は声を出して彼に存在を知らせる。

彼女がいた事を忘れて黄昏ていた。声を出してくれなかったら、そ

のままの体勢で何分でも黄昏でいただろう。

「すまなかった。」

私は謝られてびっくりした。こっちが困ると言うものだ。

「で、あなたは誰ですか？ 私は庵崎です。昨日は本当にすみませんでした。」

俺はやっと、彼女の口から名前を聞いた。

「ごめんな。俺は2年の夜屈晴輝だ。やなきはるきあと、これお前のだろう？ 庵崎。」

軽く呼び捨てをしてみた。何だかやった本人が恥ずかしくて死にそうだった。ポケットに入っていた珈誉のケータイを取り出す。

「あつ、私の携帯電話。夜風さん本当にありがとうございます。なにか、お礼がしたいのですが・・・」

俺はこの言葉を待っていた。

「じゃあ、1つ聞いていいか？」

「はい、なんでも」

彼女は笑顔で言う。

「庵崎お前、イジメられているだろう？」

珈誉は微笑んだまま固まった。

「何で、と言うより。私、イジメられてるなんて無いですよ」

彼女の視線が不自然にキョロキョロする。これは嘘を付いている時によくある癖だ。そう、彼女はイジメられている。

「冗談だ。けどメル友ぐらいには成らしてくれねえと困る。」

彼女は太陽のように暖かな笑顔を放った。

「仕方ありません。分かりました、メル友だったらオッケーです。」

俺は彼女にメアドを教えて午後の授業をさぼって、空を見上げた。

あつと言う間に授業が過ぎていく。こんなに速く授業が進んで行くのは私が夜風に出会ったからなのだろうか。彼はイジメがどうか言っていたがもう気付いてしまったのだろうか？私が半年ぶりにこの学校の人と口をきいたことに。

俺はいつメールをしようかと授業の間中ずっと考えていた。

寂しく最終下校を知らせるチャイムになる。

いつものようにと靴を履くと下駄箱の中に小さく丸められた紙が入っていた。私はそれを手にとって広げて見る。

『珈誉へ、昨日はごめんな。ちゃんと明日も学校へこいよ。なんか嫌なことがあったらすぐに俺に相談しろよ。じゃあメール待ってるからな。』

一方的な内容だと私は思った。メールアドレス位知っているはずなのに、何で私からメールをしないとイケないのだろう。そんな屁理屈を思いながら頬を伝う涙をぬぐった。そして私は学校を後にする。

いつもは、駅まで携帯電話を開かないようにしていたけど、夜風が気になって仕方なかったのでメールをうつ。

『夜風くん、お手紙ありがとう。メールでお返事をします。昨日の事は気にしないで下さい。私からのお願いです。』

私は短すぎる返事を夜風に送った。そしてまたあるきだす。数分もしない内に私の着信音では無い音が聞こえる。

俺は下駄箱にいた珈誉に話しかけられずに後を着ける形で後ろから様子を見ていた。すると、俺のケータイの着信音が鳴り響き珈誉が振り返って俺の視線を奪い取った。

振り返ったとき、私の視線が夜風くんとぶつかった。びっくりした後ろにいるとは思わなかったからだ。

「夜風くんも今帰りだったんですか？」

私は唐突に下を向いて質問をする。

「そうだよ。ところで、庵崎は電車で帰るのか？」

「はい。電車です。」

夜風くんは恥ずかしそうに空を見上げていた。

「そうか。じゃあ駅まで一緒に行こう。」

私はその言葉を聞くなり顔が熱くなっていった。

「いいんですか？」

断りきれない自分に私は恥ずかしくなった。

「じゃあ行こうか」

珈誉は顔を真っ赤にしていた。俺も顔が赤くなっているかもしれない。それだと恥ずかしい。

私は、夜風くんの後を付いていく。

「何で、イジメられているんだい？」

夜風くんが唐突に聞いてきた。

「何でイジメと言う言葉が出てくるんですか？」

私が聞くなり夜風くんは空を見上げた。

「今日、庵崎を尋ねて教室まで行った時。クラスメイトが庵崎の事を無視してるなって思った。後、庵崎が俺と話す時、一回だけ俺に嘘を付いた。」

私の頬を温かいものが伝った。

「イジメられているだろう。」

私は振り返った夜風くんに頷いた。

「そうか。理由はなんとなく分かるから言わなくて良いけど、今の自分を変えたいと思ったりはしないのか？」

夜風くんは私の頭をそつと撫でた。

「変えたい。けど、出来ない。もう遅いんです。」

「いや、遅くはない。だって、珈誉が話せない訳じゃ無いんだから。」

珈誉がびつくりしたように俺をみる。

「夜風くん、いま、珈誉って読んだ？」

俺はしまったと空を見上げた。つい心の中の事を話したら知らないはずの名前を口ずさんでしまった。

「庵崎、ごめんな。俺、ケータイの中を勝手に見た。だから教室に

行った時も名前知ってて。その、本当にごめんな。」

珈誉はなぜかにつこりと微笑んでいた。

「そうだったんですか。だから私の教室も分かったんですね。じゃあ私も頑張つて事実を述べます。」

彼女はにつこりとしたまま語り始めた。

「私、イジメられているんです。イジメって言うかは自信無いんですが。無視はよくされるんです。」

彼女はまだ笑っていた。俺は見ている内に中学の頃を思い出していた。

「そして、夜風くんに手を握られた時久しぶりに人と口をきいたことに気付きました。」

私は恥ずかしくなって顔を下に向ける。

「ありがとう」

俺はなぜかお礼をいい、珈誉を抱きしめていた。

「晴輝、私。」

珈誉が俺の名前を胸の中で読んだ。

「俺、珈誉が・・・」

「好き」

同じタイミングで放たれたその言葉は俺の心を揺さぶった。

私は晴輝の言葉にびっくりした。

君がなぜ笑うのかわかったよ。嬉しい事じゃ無くても笑うのはきつと辛いことを忘れるためなんだ。君がいったあの言葉は俺の心を揺さぶった。そして俺思い出したんだ。君が閉じ込められていたあの世界が俺にも有ったってことを。忘れるところで思い出さしてくれてありがとう。さあ。これからはもっと綺麗な物を沢山見せてあげるよ。汚い物を見すぎた君に・・・

私を出させてくれてありがとう。嫌なことがある度に笑ってやり過ごしていた私は恥ずかしい人だね。それなのに、手を差し出してくれて嬉しかった、好きって言ってもらって恥ずかしかった。けど本当にありがとう。そして、私にもっと綺麗な物を沢山見せてね・・・

私はワクワクしながら学校へ行く。夏休みも終わり、新しい空気が流れている。晴輝はサッカー部に入っていて、毎日のように応援していたら私もいつの間にか、マネージャーになっていた。けど、前のようなイジメはいつの間にか消えていた。そして、その跡には楽しい学校生活が待っていた。

「晴輝！頑張れ！」

楽しいと言っよりも楽し過ぎる毎日。

俺は珈誉の応援で毎日の元気を与えられる。

珈誉に手を振ると珈誉はてれくさそうに振り替えしてくれる。珈誉のイジメが無くなって本当に良かった。

部活が終わる。俺達と一緒に帰る。オレンジを乗り越して、藍色に染まって行く空に星が散っている。

「珈誉、見てごらん。星が散って本当に綺麗だ。」

俺達はまた歩き出す。

（後書き）

久しぶりに恋愛を書きました。忙しくなってきた今日この頃ですが、頑張って行きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0850e/>

Despairと言う名の希望。

2011年1月1日14時59分発行